

科学とともに科学者を伝える

Kaoru SAKATA **坂田 薫** 化学講師



科学技術の話題は優先順位が低い？

「ニュース番組は、いわゆる『文系』で構成されているからね」。そう言われて、初めて意識した。確かに、当時コメンテーターとして出演していたニュース番組でも、扱うニュースの多くは政治や経済、大きな事故や事件、そして世界情勢に関することだった。科学技術などのニュースがないわけではない。扱うことはあっても、軽く流されてしまう。しっかり時間を割いているのはノーベル賞を受賞した研究くらいだろう。当然、コメンテーターも元政治家、弁護士、経済学者…。ほとんどが大学受験において文系に分類される学部出身。理系学部出身のコメンテーターは医師くらいだったと思う。

しかしなぜ、科学技術の話題は取り上げられにくいのだろうか。目の前の生活に直結している政治や経済の話題と比べ、優先順位が低いだけだろうか。確かに、税金や年金、手当などは家計に関わる問題で、場合によっては今の生活レベルを維持できなくなる。強い興味関心を示すのは当然だ。では、それらに関する大きな話題がないとき、代わりに科学技術の話題が選ばれているだろうか。いや、決してそうではない。

世の中は、科学恐怖症。

以前、とある出版社に「日本発の最先端科学技術を知ってもらおう本を書きたい」と申し出たところ、次のような理由で丁重にお断りされた。「『科学』というだけで敷居が高いんですよね。どうせ読んでもわからない、と本を手取る人自体が少なくて…」、「多くの方は、それがどんな技術なのか深く知りたいと思っていないですよ。最終的に自分の生活が便利になればそれでいいというか…」。

私は正解にたどり着いたようですっきりとした気持ちになった。「だからニュース番組でも軽く流されるのか」。ほかと比べて優先順位が低いんじゃない。そも

そも関心がない、もしくは、聞いてもわからないと諦めているのだ。

そして私はなんとも言えない不安に襲われた。日本の科学技術や科学者を盛り上げていくには、私たちが興味関心を示し、声を上げていくことが必要だ。出版社の回答が正解ならば、当然、日本の科学技術は衰退の一途をたどるだろう。そしていつか、先人たちが作り上げた「技術大国ニッポン」が、跡形もなく消えてしまう日がやってくるかもしれない。衰退していく世界に夢や希望を感じる若者は、どのくらいいるだろうか。「科学離れ」などと言われているが、そんなレベルではない。「科学恐怖症」、「科学無関心」だ。

これをきっかけに、私は「どのように伝えれば、科学技術に興味関心をもってもらえるか」と考え始めた。そしてそのヒントは、自身の経験の中にあると思った。

感情を揺さぶること

さて、ここで少し私の話をさせていただこうと思う。私の本業は予備校の化学科講師。文系から理系のトップクラスまであらゆる層に化学の講義をしてきた。ストイックに向き合ってきた甲斐があり、予備校講師という枠の中ではある程度知られるように。そのおかげで、ニュース番組のコメンテーターのお話をいただくこともできた。

そんな私が、予備校講師として、特に大切にしていることは2つ。1つ目は「黒板に書く文字も、口で話す言葉も、限界まで減らす」こと。説明が多ければ伝わりやすいわけではない。たくさん書いて、たくさん話して伝えるのは、伝える側の努力不足だと断言できる。より少ない文字や言葉でどう伝えるか。伝える側は模索しなくてはいけない。そうすることで、相手は、よりラクに吸収できるのだ。

そして2つ目は「感情を揺さぶる」こと。それは「楽しい」、「嬉しい」だけではない。「悲しい」、「不安」な

んでもいい。講義の中で感情を刺激する瞬間を作るよう心がけている。大学入試で得点を取るための講義に感情なんて必要ない、と思われるかもしれないが、相手はやはり人間。感情を揺さぶられたことで、講義が印象に残り、満足感を得る。映画やテーマパークのようなイメージだ。「楽しい」や「怖い」といった様々な感情が刺激され、その余韻に浸りながら家路につく。そして、なぜかまた足を運んでしまう。

もちろん、私の技量では映画やテーマパークには遠く及ばない。それでも、こだわり続けてきたからこそ今の私がある、と信じて今も教壇に立っている。

科学とともに科学者を伝える

科学恐怖症、科学無関心という手強い相手に、日本発の科学技術を伝えるにはどうすればいいのか。自身の経験をふまえて考えた結果、私は2つの対策を講じることにした。1つは「専門用語を極力使わず、少ない言葉で伝えること」。これは、科学を少しでもわかりやすく伝えるため。そしてもう1つは、「科学とともに、科学者を伝えること」。これは、相手の感情を揺さぶるためだ。科学技術だけを伝えると、どうしても無機質で淡々としたものになりやすいが、そこに科学者が登場すれば、一気にドラマチックになる。その科学者の人生を垣間見ることになるからだ。

実際に私は、科学者自身に何度も感情を揺さぶられた。科学者が1つのことを追求し、それを楽しんでいく姿に心を打たれ、自分自身と向き合うチャンスを得たことがある。挑戦と失敗を繰り返しているときの科学者自身の感情に共感し、勇気もらったことだってある。感情が揺さぶられるのは、研究に関することだけではない。その科学者の日常に親近感を覚えることもあれば、人生の教訓を学ぶときもある。科学者の人となりに救われ、尊敬の念を抱くことだって少なくない。

こうした科学者自身の姿を世に発信することで、科学技術に興味をもつ大人が増えるだけでなく、科学者という職業に憧れ、それを目指す子供も増えると私は信じている。

やり続けることが、大切。

こうして進むべき道を決めた私に、何人もの方が手を差し伸べて下さり、なんとか2つのものが形になった。1つは、昨年出版した『家飲みビール』はなぜ、美味しくなったのか? という新書。この本は、東京大学卓越教授の藤田誠博士による「結晶スポンジ法」や東京女子医科大学特任教授の岡野光夫博士による「細胞シート工学」など、17の日本発の科学技術を紹介。それぞれについて、開発した博士の言葉を載せた。

そしてもう1つが、ジャーナリスト堀潤さんのYouTube番組「8bitNews」の中で月に1回放送している「SCIENCE NEWS」だ。毎回、日本発の科学技術を紹介した後、開発した博士に登場いただき、研究に関することや、それ以外についてインタビューさせていただいている。

残念ながら、どちらも絶好調とは言えない。むしろ、苦戦していると言ったほうがよいのかもしれない。そんな中、弱気になっている私を励ましてくれたのは、科学者である博士の皆さんだった。「誰もやっていないことをやろうとしているのだから、最初からうまくいかないのは当然のこと。やり続けることが大切なんだよ。何かあれば協力するから、とにかくやり続けなさい」。この言葉を胸に、私は、科学とともに科学者を伝え続けていく。

© 2022 The Chemical Society of Japan

ここに載せた論説は、日本化学会の論説委員会が依頼した執筆者によるもので、文責は基本的には執筆者にあります。日本化学会では、この内容が当会にとって重要な意見として掲載するものです。ご意見、ご感想を下記へお寄せ下さい。
論説委員会 E-mail: ronsetsu@chemistry.or.jp